

# 481 評議員 候補 QUARTETTE No.1

## 理学部でいかに学ぶか

Henri Poincaré は云う。

"La recherche de la vérité doit être le but de notre activité; c'est la seul fin qui soit digne d'elle." と。

理学部における我々の行動の目的は「真理の探究」である。同時にひとりの人間として、社会的な善や芸術的な美ということも意識に留めておきたい。

特に我々がたずさわる自然科学は社会に与える影響が大きい。最悪の場合には人類の存在そのものに危機を与える。このひとたび認識された科学者の「罪意識」を忘れてはならない。↑

大学を、ひいては科学を軍事研究等の社会的な  
悪のために奉仕させないためには、大学の自治が必要である。さらに我々の身近な種々の要求を実現していくためにも大学の自治は必要である。

与えられたカリキュラムを馬鹿馬鹿しい目もふらずこなしていけば、科学することになる、というのは間違いではなかろうか？ そうして大學の自治というものに一切かかわるまいとする態度は反省されなければならない。

真理の探究と共に現実の認識も不可欠なのである。(Q)

## 暴力容認二候補を拒否する！

81年10月24日のことである。

C(教養部)自治委員会を開催するため、会場であるA141に行こうとするCの常任、自治委員たちに赤いヘルメットをかぶった集団が襲いかかった。彼らは前もってA141に潜入していたのである。彼らは殴る、蹴るといった暴行を加えたばかりではない。常任委員長の伊藤氏をつかまえて、ひきすり回し、伊藤氏を助けようとした学生にも暴行した。負傷者は22名にのぼり、被害総額は20万円にものぼる。我々はこの暴行を許すことは断じてできないと考える。↑

問題はこの暴行に加担した学生F、その暴行を容認する学生たちS、Tの3名が、この評議員選挙に立候補していることである。我々はかような暴力を容認する3候補は評議員になる資格を持ち合わせていないと判断する。

Sokratesの対話術やBlaise Pascalの證得術をひくまでもなく、意見や認識の相違は理性的な議論によって克服されるべきものである。それは理学部で科学を尊ぶ我々にとって最も基本的な態度である。

その意味で我々は上記3候補を拒否するものである。(Q)

No.6 奥田則之 (4C)

No.17 岡 達治 (4P)

No.16 秋山茂樹 (4M)

No.18 日高 朗 (4M)

481 理学部1組 N.Okuda, S.Akiyama, T.Oka and R.Hidaka  
1982年6月28日